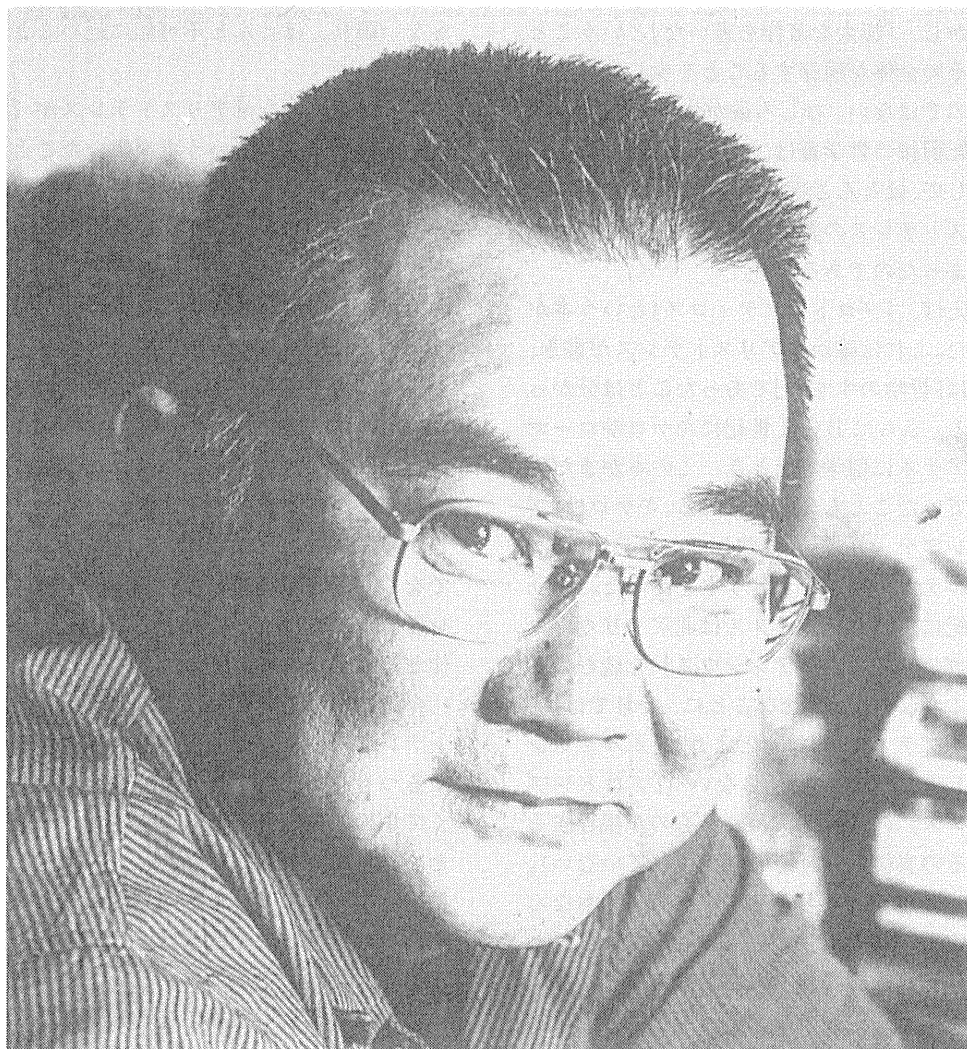


# 閲覧ニュース

73号

1994. 7



開高 健

## アリストテレスの著作の謎

山根 和 平

哲学にあまり関心のない人でも、「アリストテレス」という名前だけは、どこかで聞いたおぼえがあるのではないだろうか。彼はギリシアの哲学者の中でも「万学の祖」と言われるだけあって、あらゆる学問分野にわたって研究を行い、膨大な著作を書いた。

しかし、「膨大な著作を書いた」ということは、その全体が現存することを少しも意味するものではない。むしろ彼が生きていた B.C. 4 世紀前後の哲学書は、プラトンの著作を例外として、ほとんど現存しないと言ってよい。アリストテレスの著作も多くのが失われてしまったのである。

例えば、『プロトレプティコス』という本があった。これは確かにアリストテレスが書き、内容は「哲学のすすめ」であったことは分かっている。さらに B.C. 1 世紀にキケロがローマからアテネに留学したとき、この本がまだ現存していたことも分かっている。キケロは『プロトレプティコス』を模倣して、ラテン語で、『ホルテンシウス』と言う本を書いた。A.D. 4 世紀にアウグスティヌスは北アフリカのカルタゴの町で『ホルテンシウス』を読むことになる。しかし、残念なことに、今日では『プロトレプティコス』はもとより、『ホルテンシウス』という本も現存しない（『プロトレプティコス』の断片と言われるものが現存するが、その真偽は今日でも確定されていない）。

古代の本がなぜ現存しないのか。「本なんか、本屋に行けば、いっぱい並んでいる」というのは 20 世紀の日本の風景である。15 世紀に活版印刷術が発明される以前の世界では、「本」というもののあり方が今日とは全く違っていた。古代の図書は、若干の例外を除いて、もともと部数が少なく、それだけ貴重でもあり、高価なものでもあった。（それにしても 1

冊ぐらい残っていてもいいのではないか）と思う人があるかもしれないが、本がパピルスや羊皮紙であって、金属や石のように長持ちするものでないことを考えれば、原著者の手稿はもとより、その写本ですら、今日まで現存するということは、よほどの偶然でもない限り、ほとんど不可能に近いことが分かる。

「それなら、なぜアリストテレスが『プロトレプティコス』という本を書いたことが分かるのか」という疑問が生じて、別にふしぎではない。しかし、西洋では古代の有名な著作家の場合、たいてい「著作目録」というものが作られていた。著作目録さえ現存すれば、失われた著作でも少なくとも書名と巻数ぐらいいは分かることが多い。ところがアリストテレスの場合には、ここからが謎になる。それは「アリストテレスの著作には三種類の著作目録がある」というところから始まる。しかも三種類の目録が相互に食いちがうだけでなく、厳密な意味では現存の「アリストテレス全集」(Corpus Aristotelicum) 所収の著作と一致しないのである。

今日知られているところによれば、アリストテレスの著作には、彼自身が最初から公表するつもりで書いたものと、公表の意図がなく単にメモやノート等にすぎなかったものと、二種類あるように思われる。さらに前者は初歩者向けの著作と専門家向けの著作に分かれるので、細かく言えば三種類あったということになる。

三種類のうち、最初の二種類、すなわち、彼が公表するつもりで書いたものは、断片を除いて、すべて現存しない。現存するものは第三のもの、つまり彼が公表する意図をもたなかったメモ、ノート、資料、未完成な論文

等々の類である。これらの文書がふしぎな運命をたどって、「最後のペリパトス学徒」と呼ばれるロードスのアンドロニコスの手に入るまでの「いきさつ」は、ここに書くにはあまりにも長い話になるので省略せざるを得ない。けれども、この時点でアンドロニコスが苦心して分類整理した原稿が、今日の「アリストテレス全集」の母胎となったことは間違いないところである。

少なくとも現存の「アリストテレス全集」が、アリストテレスの著作の全体でないことは確かである。それでは、「アリストテレス全集」所収の著作がすべてアリストテレスの真作であるかどうかというと、その辺が再び謎になる。「アリストテレス偽書」と称される文書は古くから数多くあった。なかには13世紀にトマス・アクィナスが偽書と見やぶった『原因論』のような著作もあるが、真作か偽作かを見分けることは今日でも至難のわざであり、「アリストテレス全集」に含まれるからといって真作であるという保証はない。アリストテレスの著作の謎は、むしろ調べれば調べるほど、ますます大きく深くなっていくようである。

(哲 学)



### 相互貸借について

探している文献が教養図書館で見つからないとき、あきらめたりしないで1階メインカウンターで相談してください。必要とする図書や雑誌論文が当館にない場合、他の図書館との協力によって、それを取り寄せることができます。相互貸借は、閲覧・貸出・複写のいずれかの形で行われます。申込みは、1階メインカウンターで「相互貸借申込書」に記入してください。

※閲覧 相手館に連絡し、紹介状を発行します。

※貸出 国立国会図書館・相模女子大附属図書館その他貸出可能な図書館のものに限ります。

※複写 文献を複写物の形で取り寄せます。現物が届くまで約1週間を要します。

複写料金は相手館により異なりますが、郵送料その他手数料を含めて全て申込者の負担になります。

### 閲覧証をまだ受け取っていない人へ

図書館を利用する時には、閲覧証が必要です。まだ受け取りにきていない人は、教養図書館1階メインカウンターまで来て下さい。

閲覧証は、卒業するまで有効です。

医学部・理学部の人は、それぞれの図書館カウンターで受け取ってください。

## 平成 5 年度 教養図書館統計

1. 開館総日数 272日

2. 年間入館者数 106,321人

1日平均入館者数 391人

3. 施設使用状況

|     |     |      |      |        |     |
|-----|-----|------|------|--------|-----|
| 記念室 | 研修室 | ゼミ A | ゼミ B | 教職員閲覧室 | 合 計 |
| 52  | 170 | 204  | 131  | 4      | 561 |

4. 学年別〈所属別〉貸出比率

|       | 単 行 本 | 雑 誌      | 合 計        | 比 率 (%) |
|-------|-------|----------|------------|---------|
| 1 学 年 | 5,736 | 384(79)  | 6,120(79)  | 65.5    |
| 上 級 生 | 1,289 | 220(26)  | 1,509(26)  | 16.1    |
| 学 生 計 | 7,025 | 604(105) | 7,629(105) | 81.6    |
| 教 職 員 | 1,365 | 348(38)  | 1,713(38)  | 18.4    |
| 合 計   | 8,390 | 952(143) | 9,342(143) | 100     |

( ) 内はOvernight

5. 雑誌現行受入タイトル数

|         | 購 入 | 寄贈・交換     | 研 究 室 用 | 小 計       |
|---------|-----|-----------|---------|-----------|
| 国 内 雑 誌 | 257 | 480 (437) | 18      | 775 (437) |
| 外 国 雑 誌 | 46  | 3 (1)     | 4       | 53 (1)    |
| 合 計     | 303 | 483 (438) | 22      | 808 (438) |

( ) 内の数は紀要のタイトル数を示す

6. 雑誌タイトル別貸出ベスト5

| 順 位 | 合 計 | 雑誌名       | 学 生 | 教 職 員 |
|-----|-----|-----------|-----|-------|
| 1   | 68  | Newton    | 67  | 1     |
| 2   | 39  | 奥野法学ゼミナール | 39  | 0     |
| 3   | 35  | Nature    | 3   | 32    |
|     | 35  | 北里大学教養部紀要 | 35  | 0     |
| 5   | 29  | 日経サイエンス   | 19  | 10    |

7. 現有蔵書数（視聴覚資料・単行本）と平成5年度貸出数

（平成6年3月31日現在）

| 蔵 書 数  |        | 比率<br>(%) | 主 題       | N D C | 貸出数（冊） | 比率<br>(%) |
|--------|--------|-----------|-----------|-------|--------|-----------|
| A V 資料 | 単行本(冊) |           |           |       |        |           |
| 806    | 5,403  | 7         | 総 記       | 000   | 270    | 3         |
| 16     | 6,853  | 8         | 哲 学       | 100   | 356    | 4         |
| 92     | 8,268  | 9         | 歴 史       | 200   | 371    | 4         |
| 104    | 11,842 | 13        | 社 会 学 科   | 300   | 476    | 6         |
| 135    | 21,268 | 24        | 自 然 科 学   | 400   | 4,330  | 52        |
| 75     | 2,565  | 3         | 工 学 ・ 工 業 | 500   | 317    | 4         |
| 106    | 1,184  | 1         | 産 業       | 600   | 113    | 1         |
| 1,010  | 5,766  | 8         | 芸 術 ・ 体 育 | 700   | 386    | 5         |
| 743    | 5,110  | 7         | 語 学       | 800   | 398    | 5         |
| 64     | 15,326 | 17        | 文 学       | 900   | 1,101  | 13        |
| 0      | 2,712  | 3         | 未 分 類     | 新書他   | 272    | 3         |
| 3,151  | 86,297 | 100       | 合 計       |       | 8,390  | 100       |

## 図書館の本

座 間 佳 美

とても面白い本や記憶に残る本を読んだとき、内容はもちろんだがその本をいつどこで手にしたかも覚えていることが、私にはよくある。主な本の入手法は書店で買うか図書館で借りるかのどちらかである。買った場合でもなぜその店に入ったのかとか、その本を買おうと決めた理由とか思い出せるものもあるのだが、今回は図書館（もしくは図書室）とそこで読んだ本の話をしたと思う。

まずはアレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』である。高校の入学式での校長先生の話に触発されて読んだ本である。見つけたのはむろん高校の図書室だ。その図書室は校内の一番西側、人通りの少ない棟の一角にあった。わかりにくいうえに寂しい場所で、始めて行ったときはとても不安だったのを覚えている。岩波文庫版のこの本は全7巻でそのとき長い話が読みたかった私にはちょうど手頃であった。それに私は小学生の頃『巖窟王』を読んだことがあった。後に、『巖窟王』というのは翻訳されたときに付けられた題名で原題は『モンテ・クリスト伯』といいとても長い物語であるということを知り、機会があったら読みたいもののひとつだったということもある。この本は周囲の人に陥れられ全てを失ったエドモン・ダンテスが数十年を掛けてその人たちに復讐するという話である。今でも物語のあらすじと共にとても楽しんで読んだということとその本を借りた図書室のたたずまいが思い起こされる。入口の左手には書庫への通路とL字のカウンターがあった。閲覧室は三方がガラス窓で教室3つ分くらいスペースがあったが試験前を除くと利用

している人は少なかった。岩波文庫は入口正面の右寄り、背の低い3段の棚にまとめられていた。よく覗いていた新着図書用のガラスケース、天井まであった書庫の本棚の様子など結構覚えている。ここには3年間通い他にもいろいろな本を読んだが『モンテ・クリスト伯』の印象が最も強い。私の中では未だに『モンテ・クリスト伯』と言えばこの図書室のあの棚に並んでいた『モンテ・クリスト伯』なのである。

さて、この私が通っていた高校のとなり、図書室の窓から見える側に中学がある。中学1年のとき、私はこの学校の生徒だった。そのときの国語の授業で週に一度図書館に行って読書する時間というのがあった。そこで読んだもののうちの一冊にジュール・ベルヌの『海底二万里』がある。旺文社の文庫版でハードカバーのかなり分厚い本だった。ベルヌの作品はそれ以前にも『十五少年漂流記』とか『八十日間世界一周』なんかを読んでなじんでいたということもあったが、選んだ決め手は解説の完訳の一語であった。そのころの私の読書傾向は翻訳物一辺倒だったのだが、出会った本のなかには抄訳と言われる子ども向けに出版されたものも多かった。完訳の本はあこがれだったのだ。本来は潜水艦ノーチラス号とそれを操るネモ船長の話であるが、さすがに完訳、この版で印象的なのはづらづらと何行にも渡ってカタカナ表記されている海洋生物の名前である。語り手であるノーチラス号に拾われた博物学者が艦窓からみえるものを説明してくれる際には必ず出てきた。こんな読後の感想とともに思いだすのはやはり

図書館の様子である。この中学に在ったのは図書館だった。理科室や音楽室のように校舎の一角にある図書室ではない。独立したそれ専用の建物、図書館だった。更に珍しいことに木造だった。内も外もこげ茶色に塗られそのせいか薄暗く感じることもあったが、とても落ち着く独特の雰囲気を持つところであった。青々とした芝生の上、つつじのしげみの向こうに見える図書館を今でも思いだすことがある。

以上述べてきた図書室と図書館は今ではもう両方とも存在しない。数年前、高校は古い校舎を取り壊して新築したということである。当然図書室も瓦礫となり、多分年代物の木製の本棚なども処分されてしまったことだろう。しかし蔵書は新築の図書室に引越したはずである。私の読んだ『モンテ・クリスト伯』もまだ現役かもしれない。中学の図書館は、私がそこを離れて8年くらい経ったところだったろうか、火事になった。古い木造のうえ中は可燃物がいっぱいである。全焼だったということだ。これを知ったときはがっかりしたというか残念だというか複雑な気分がした。

よくよく考えてみれば、小学校のプレハブ図書室ももうないだろうし、大学の図書館も移転でさら地になっちゃった。しかし、そこで出会った本を目にすれば、もうない場所がなつかしく思いだされる。（化 学）

## 相模原市内大学図書館等と相模原市立図書館との相互協力に関する協定について

去る'94年4月1日に、相模原市内にある6つの大学と相模原市立図書館等の市立図書館3館との間に、図書館サービスの向上を図るため、相互協力についての協定が締結されました。

この協定は、それぞれの大学図書館の利用規定に基づいて行われるため、各協定館の事情が許す範囲での相互協力を意味します。ですから、市民の利用は、ある程度制限されます。詳しくは、教養図書館1階メインカウンターでおたずね下さい。

相互協力協定館一覧  
麻布大学附属図書館  
和泉短期大学図書館  
北里大学衛生・理学部図書館  
北里大学医学図書館  
北里大学看護学部図書館  
北里大学教養図書館  
相模女子大学附属図書館  
女子美術大学図書館  
職業能力開発大学校図書館  
相模原市立図書館  
相模原市立図書館相武台分館  
相模原市立相模大野図書館



澤田博司

知らず知らずのうちに心の隅に溜った綿埃がある。それには目があり耳がある。開高健（かいこう たけし）氏の小説は、そうした綿埃に一流の手を付けその手にペンを持たせたのである。初期の彼は、寿屋（現サントリー）の宣伝部でキャッチコピーを作るかたわら文学作品を書くという二足のわらじ生活が続いていた。程なくして芥川賞を受賞し退社するが、囑託として宣伝活動は続けていた。しかし、その後の彼は作品をコンスタントに発表し世間でそれなりの評価はされるものの自分自身納得できる作品は書けないでいた。そんな時彼は、まだほとんどニュースになっていなかったベトナムの内戦に朝日新聞の海外臨時特派員としてカメラマンの秋元啓一氏と共に取材に出かける。第一線に従軍中、ベトコンの包囲網に遭い彼の従軍していた部隊200人がほぼ全滅してしまう。生き残った者は、彼と秋元氏を含めたたった17人だった。その後の彼の作品は、完璧なまでに磨きがかかる。その時の体験を元にし書き下ろした「輝ける闇」、生でもなく死でもない、善でもなく悪でもない、右でもなく左でもない混沌とした自分の心の隅の綿埃に一筋の灯を求めた「夏の闇」、丸善の本棚に置かれた檸檬を思い出させるような「玉、碎ける」などは、日本の文学作品の中でもトップクラスに属している。私自身、良きにつけ悪しきにつけ彼の作品から

多大なる影響を受けてしまい彼の足跡、残り香などをヨチヨチ、ヨタヨタ辿ってはみるものの、せいぜいトリスのハイボールを飲んで酔っぱらう事くらいしか出来ないでいる。1989年12月9日、彼は食道癌のためこの世を去った。享年58歳であった。訃報を知ったのは学会出張のため訪れていた博多の街の電光掲示板であった。目の前が暗くなったのを今でもしっかりと覚えている。北鎌倉の円覚寺に眠る彼に会いに行く度に生前の彼の口癖が聞こえてくる。“悠々として急げ”、“森羅万象に多情多恨であれ”。

（生物学）

#### 夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の開館・閉館・貸出等については、下記の通りです。

##### 1) 長期貸出

7月25日(月)～9月20日(火)

但し、雑誌は対象外です。

##### 2) 開館時間

7月28日(木)～9月17日(土)

平日：午前9時～午後5時

土曜日：午前9時～午後1時

##### 3) 閉館

8月15日(月)～8月20日(土)

閲覧ニュース73号

1994.7発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

電話 (0427) 78-8005

発行責任者 手塚 甫